

わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究

「レクリエーション学」の体系化の方法と戦略

話題提供者 鈴木 忠 義(東京農業大学)
 コーディネーター 進 士 五十八(東京農業大学)
 報告者 麻 生 恵(東京農業大学)

1. はじめに

司会(進士)先ず、本学会が昭和57-58年度を通じての連続研究集会をもつことについて、今回が第1回でもあるので、その目的と内容の概要についてお話する。「レクリエーション(以下レクと省略)学」といっても、初めて耳にされる方もおられるぐらい体系化も十分でない。だが、現実の社会的対応の必要性は高まっている。そうした中で、それぞれ個人的には「レク観」をお持ちだと思うが、学会として体系だった「レク学」を確立すべく第一歩をふみ出すべきだということで、企画委員会が検討した結果、表-1のスケジュールと内容で研究集会を開催することになった。

本日の鈴木先生のお話は、このテーマの総論に相当する部分であり、「レク学」にのみこだわらないで、むしろ現代社会でひとつの「学」というものが成立つとすれば、どのような意味あいがあり、あるいはそれを展開するのにどのような視点を持つべきか、といったことについて話題の提供を願い、参加者で討議したい。ところで「レク学」はきわめて学際的な性格を有しているが、先生は昨年まで東京工業大学社会工学科において、土木工学、観光レクリエーション、造園学

等の分野で、自然科学的・技術的側面からもっとソフトな部分まで幅広く研究されており、また国や自治体の関係で政策的なものから建設・計画にいたるまで、実に幅広い視点と活動の持ち主でもあられる。本日のテーマに最もふさわしい方である。

次回の研究集会では、本日の議論を踏まえておよその体系化(案)への概念を描いてみたい。またそれを基本に、その後の各論的な展開ができれば、「レク学の概論」ふうのフレームは出来上るのではないか。多少高望みをしているかもしれないが、この研究会の最終目標をそのあたりに設定している。そういう意味で本日は裾の広い議論が展開できればありがたい。

2. 話題提供

鈴木

(1) 研究の戦略・戦術・機材

本日のテーマは「レク学体系化をめざしての方法と戦略」という言葉の意味からお話したい。

「戦略」と「戦術」という言葉はよく間違えて使われるが、「戦略」とはどうやって攻め落とすかという「すじみち論」のことで、学問にあてはめれば「方法論」といった方がよいかもしい。この「すじみち」が決まると、次に「戦術」が出てくる。これは剣道のうまい人、弓の打ち方のうまい人といった「技術」のことで、昔は武将がそれを訓練したわけである。したがって、この戦略と戦術の関係は参謀と将軍の关系到相当する。また「機材」というのは武器・弾薬といったもので、学問的にいえば、ハンドブックやポケットブックなどその学問分野の蓄積ということになる。学問が完成するということは、理論、概念、分析、評価が追求され、方法論とデータブックが体系的に完備され、常に修正が進むことである。

ところで、図-1に示したように、戦略・戦術・機材というひとつの構造に対して、それを求める戦略論がある。また更にその戦略論に伴う戦術・機材を求め

表-1 研究会のスケジュールと内容

回	日程・場所	テ - マ
1	82.10. 5 (東京農業大学)	レクリエーション学の体系化をめざして(その方法と対象をめぐってのフリーディスカッション)
2	82.11.27 (日本体育大学)	レクリエーション学の対象と方法を中心として(レクリエーション学の体系化試案)
3	83. 1.29 (上智大学)	レクリエーション原論を中心として
4	83. 6.25 (東京農業大学)	レク資源・レク空間論を中心として
5	83. 9.20 (立教大学)	レク行動・レク指導論を中心として
6	83.11.26 (上智大学)	レク政策・レク学教育論を中心として

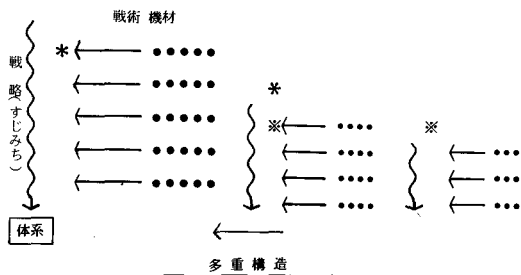


図-1 研究の戦略・戦術・機材

表-2 レクリエーション学体系案

(1) 概念と諸学の位置づけ	(8) 時間
(2) 意義・目的・(役割り)	(9) 経済・産業
(3) 構成(と要素)	(10) 社会
(4) 分類	(11) 行政
(5) 歴史	(12) 情報・啓蒙・宣伝
(6) 行動	(13) 空間
(7) 活動(実技と実習)・教育	

る戦略論が存在する。要は「多重構造」になって学問というのは構成されている。したがって、あるひとつのデータを得るために、そのデータを導く方法論・仮説があり、それを調査・実験・検証してはじめてそのデータが有効になってくる。このように学問というのは多重な積み重ねによって出来ているといえる。

(2) レクリエーション学体系案

レク学についての私なりの体系化案をまとめたので参照していただきたい(表-2)。

(a) 概念と諸学の位置づけを明らかにしておくことが、まず学問においては重要である。この概念というのは最初から明確に規定する必要はなく、また時代と共に徐々に変化するものでもあり、いろいろな意見を聞きながらすすめればよいと思う。私なりのレク概念については、のちほど申し上げたい。

(b) 意義・目的・(役割り)とは、レク学が人間にとってどのような意義を持っているのか、どのような目的をもってやっていけばよいのか、ということである。

(c) 構成・(要素)とは、全体がどのような要素によって、どのような組立てになっているか、を明確にすることで、体系化には重要なことである。

(d) 分類 植物学の分野には分類学があるが、レクリエーションについても、いろんな角度からの分類があるかと思う。レク学においてもそれらの研究者がいてほしいと思う。

(e) 歴史はレクというものがどのような歴史をもっ

ているのかというものであり、大変重要な項目である。

私共が地域計画・地域振興計画等を行う場合、農山村や地方都市住民のレクをどうしたらよいかという問題が生じる。そういう時の説得材料としてレクの歴史は大変重要である。例えば、サッカーの起源というのは、スコットランドの広々とした地形の中で、タウンゲートの中に球を蹴り込んだ方が勝ちという遊びをルール化して生まれたものである。ゴルフも同じようにスコットランドの風土の中で、牧童たちが羊や牛の糞の固まり棒でたたいて遊んでいたのをルール化していったものであり、この競技化することによって人間は大変エキサイトするわけである。このように、レクというのは自分たちの足元からどのように考えていこうかが非常に大事なことである。既成のレクをどう移入するか、或いは同時に新しいレクをいかに開発していくかという場合に、この歴史学は発想法として重要な分野ではないかと思う。

このように歴史的研究は応用分野において大変重要であって、またそれ自体、レク史というのは社会学、経済学等様々な分野から求められるのではない。

(f) 行動の学は行動科学の一部に入るかもしれないが、どうしたらそうしたレク行動が起ってくるのかといったことは、心理学や社会学など様々な周辺の学問的方法を援用しつつ研究されてしかるべきではない。

(g) 活動という言葉は、ここではレクの種目という意味で使っている。種目の開発問題、新しい考え方、実技・実習、あるいはその教育法なども重要な分野ではないか。

(h) 時間の問題は、むしろ余暇論の問題かと思うが、人間の一生という時間の中で、青少年の時期、社会的に活躍している時期、あるいは老後といわれる時期のレクがどうあるべきかといった問題も大きい。NHKなどでは番組編成のため、かなりのデータを蓄積しているし、労働省、通産省などでも今後の課題になっている。

(i) 経済・産業 経済というのは、レクをする人たちのふところ具合のことで、つまり、消費者、お金を使う側の問題からも考えなければならない。経済企画庁あたりではこの問題を研究しているが、産業という側面から考えると、これはいわゆる余暇産業、観光産業といわれていて、またそれに伴う道具や施設の開発などがこれに含まれる。特に最近のスキー用具などは大変高価なものや新しいものが現われてきて、日本の場合はそれが産業になりやすい。また、それに人々が

引きずられ、ひとつのファッションにまでなっている。いわゆるレクのファッション化が進むことになる。このような用具使用の問題は、レクがどれだけ文明化すべきかというところに問題があり、またそれは産業化との関係も考えなければならない。

(j) 社会については、レクの意義・役割りなどと大きな係わりがあって、今日の少年非行の問題なども含まれる。また、レクを我々人間社会の中に入れてゆかかという研究などもあろう。

(k) 行政といえば、行財政の問題がからんでくるが、レク行政推進の方策、レク行政不在の場合の問題点などの課題がある。我国では高度経済成長の結果、多くの省庁が何らかのかたちで観光やレク問題に施策を、つまり予算を使っている。しかし、その基本であるべきレク学の体系化が不十分なため、バラバラ行政になってきている。そういう意味からも体系化への期待は大きい。

(l) 情報・啓蒙・宣伝であるが、情報は単に資料としてあるだけでなく、それを即座に検索でき利用できるようにしておくこと、つまり検索システムとデータベースシステムの整備が重要である。また、レクを国民の中に浸透させていくために、啓蒙、宣伝といった研究も必要と思う。

(m) 空間については、レク空間・資源の量、質、配置、大きさ、形、アクセスなど様々な問題があって、私共はこうしたものについての計画学的研究を行っているが、これについては最後にやや詳しく申し上げる。

(3) レクリエーションの概念

(a) 余暇とレク、観光、スポーツの関係

労働時間は短くなってきていて、今後余暇は益々増える可能性がある。それをどう使うかということが社

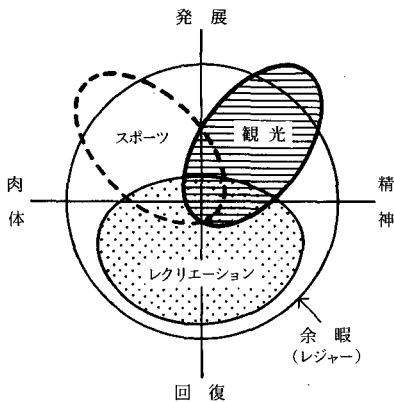


図-2 余暇・観光・レクリエーションの関係

会的にも個人的にも重要で、「余暇観」、「レク観」を明らかにする意義は大変大きい。

まず、レクや観光の多くは余暇に含まれる。これは仕事(生業)ではないという意味である。図-2において外側の円内を余暇活動全般とする。

次にマイナスをゼロにもっていく活動(回復)とプラスをよりプラスにする活動(発展)とがある。例えば、気ばらし、休養などはマイナスに下った精神や肉体の状態をもとのゼロにもっていくものである。それから、技術が向上するとか知識が増えてくるとかいう活動はプラスをより増進させる。つまり図-1において縦軸がこれに相当する。一方、横軸は肉体的なものや精神的なものの軸である。

観光をこの座標に位置づけると、横線を施した部分に相当する。余暇活動の円からはずれた外側の部分は、例えば学校でまとまって出かける修学旅行などである。次に、スポーツは破線で囲まれた部分に相当し、確かにマイナスをゼロにする効果も認められる。余暇活動の円からはずれた部分には、体育の先生やプロのスポーツマンなどが含まれる。

観光やスポーツに比べると狭い意味でのレクは多分に気ばらし的なもので、疲労した精神を回復するなど、マイナスをゼロにもっていく効果が大変大きく、また人との交流などプラスの部分も含まれる。したがってこの図では点を施した部分に相当することになる。勿論、スポーツや観光の中にもレク効果が出てくるわけだが、これは狭い意味でこのように分けた場合の概念規定である。今後、様々な側面から討論しながら学会でオーソライズしていくことが必要であると思う。

(b) 日常-非日常による分類

次に、広義のレクと狭義のレクの問題についてであ

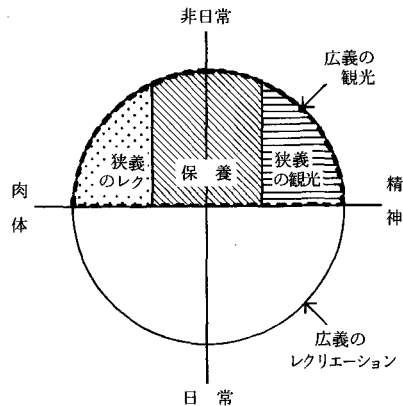


図-3 レクリエーション・観光・保養の関係

るが、空間的な側面から考えてみるとこれも二つの軸で捉えることができ、縦軸に日常 - 非日常空間、横軸に同じく精神的なものとの肉体的なものをとると、観光とは日常空間を離れて、非日常空間を回遊し、再び日常空間に帰ってくる、つまりラケット構造がその定義であるから、観光というのは非日常空間の図-3における上半分の領域(破線で囲まれた部分)に位置づけされる。その中で狭い意味のsightseeing的な観光は精神性の強い部分(横線を施した部分)、また海水浴やゴルフに行ったり観光地で行うスキーなどの活動は狭い意味でのレクとして肉体的な部分(点を施した部分)に相当する。次に、観光の中でもリゾートで読書したり、直接仕事と関係のない教養を広めるといったもの、つまり休養や修養といったものは「保養」と呼ばれていて、狭義の観光の狭義のレクの間(斜線を施した部分)に位置づけられる。

そこで広い意味での観光と広い意味でのレクはどうなるのかといえば、観光ははっきり日常空間から離れているので、上半分の円内をもって広義の観光としたらどうか、レクというのは日常非日常関係なく行われるので、円内全体を広義のレクリエーションとしたらどうかということである。

(4) 総合の学・問題解決の学

先程、社会工学科と紹介されたが、私はここに13年半ほど務めたわけだが、これは文部大臣をやられた永井道雄さんや川喜田二郎先生、鶴見俊輔先生などによって、世の中が“学”という名のもとに大変細分化されていていってしまう。もっとトータルな横の連絡をもった学をつくる必要がある、ということが議論され、それらの結果生まれたということである。考えてみると、生態学というのは大変古くからあったわけだが、なかなか陽の目をみなかった。また柳田国男先生がやられた民俗学も大変な総合の学であったが、学問としてなかなか認められなかった。しかし、何事も掘り下げてゆけば、また論理を積み重ねてゆけば必ず深くなっていく。ところが、このような諸学をくくって人間の幸福を追求していくような学が果して成立つのかどうかという議論があって、それに近いことを今まで扱ってきたのは社会学であった。しかし、問題提起だけでなく、それを解決の学問とするにはどうすればよいか、要するに社会工学は社会学から一步踏み出して、どうやったら問題が解決できるかという解決法まで出そうというものであった。

レク学も周辺の学問がたくさんあり、同様の性格を

有すると考えるが、私共はそれぞれの立場からレク学会という土俵を借りることで様々な分野の人と議論をしつつ、問題解決に向えばよいと考えている。

(5) レクリエーション空間計画の方法

(a) 計画の構造

次に私が手がけているレク空間計画の内容についてお話ししたい。表-3の縦軸に書いてあるが、この5段階の重なりをもって「計画の構造」と呼んでいる。Ⅰは後で詳しく申し上げるが、計画を行う場合、五つのことを考えるということ、Ⅱは経済学の言葉でplando seeといい、①見直しをやって、②新しく企画を立て、③実行に移して、また④それを見直していく、ということを目指す。Ⅲは、レク空間というのは人間が主体であって、この人間に対してどういう環境を造っていくかというところにレク空間計画の課題がある。つまり人間の問題を追求する必要がある。あるいは、それをとりまく環境と人間の関係が出てくるだろう。ところが、自然とか我々の造ったものはそんなに都合よくはできていないし、人間というのは過去と現在とでは価値意識が違ってくる。しかしそれに対応してこうしたモノを造っていかねばならないので、どうしても開発行為、あるいは空間や国土の管理ということが出てくる。そのとき、どういうことを基本的にもっていかなければならないのか、というのがこのⅢである。

次に、それを考えていくつめ方としては、Ⅳの価値と考え方を明確にしていくことが大事ではないかということである。例えば河川に対する価値観をとり上げてみても、最近では花火が復活したり河川敷がレク空間として様々に整備されてきている。つまり、単なる治水や水資源という河川の位置づけから脱皮して、人間の環境として扱っていかう、生態系を保ちながらレク空間として利用していかうと変化してきたからである。このように人間というものは、それ自体が価値意識を変えてくるというところに多くの課題がある。つまり、そこで計画をする場合の目標設定に、価値ともの考え方が大きく影響してくるということである。それに対して計画の対象、すなわち何を対象として空間開発するのか、川を対象に、山、森林、あるいは古い文化財のようなものをうまく使いながらやるのか、またレクの面からいえばもっとソフトな人間の心をとらえてレク空間を計画できないか、このような様々な発想がある。それは計画者の価値と考え方、あるいはその人が蓄積した専門的知識によって対象は違ってくる。

表-3 計画の構造

I 計画の5要素	5 計画の構成と構成作業員 (①意思決定者+②主体の代表者+③開発主体+④計画家)								
	1 計画の主体	2 計画の目的			3 計画の対象	4 計画の手段			
II 計画作業	1 見直し作業			2 計画作業			4 実施計画作業		
III 理念の形成	1 人間の哲学		2 環境の哲学		3 開発または管理の哲学				
IV 価値と考え方	1 思想				2 発想		3 構想		
V 計画の順序	1 生存と生きがいの探究	2 環境の基本	3 現状と課題	4 計画目標	5 計画の対象	6 基本方針	7 全体計画	8 部分計画	9 運用計画
	1 個人レベル	2 公共レベル	3 制約条件前提条件	4 目標年次目標水準	5 もの、かね、ひと、しくみ、こころ	6 諸原則	7 手段の選択	8 詳細と手順	9 活用手段と効果
計画の分野	VI 計画の段階								
①	③ 構想計画								
計画の規模	基本計画								
	実施計画								
②	運用計画								

表-4 計画の5要素と団体

(加納治郎：計画の科学 P228(1963)を参照して作成)

団体	公共計画					企業の計画												
計画の5要素	公共計画					企業の計画												
計画の主体	地域住民 + 来問者 (人間)					雇客 株主, 従業員, 役員												
計画の目的	目的 — 問題 — 課題 — 目標 個人 健康, いきがい 社会 最大多数の最大幸福 (福祉国家の原理として再認識)					利潤 企業の安定成長 企業の社会的貢献												
計画の対象	もの	か	ね	ひと	しくみ	こころ	もの	か	ね	ひと	しくみ	こころ						
	地 域 租 税 技 術 法 律 や り 気 施 設	資 源 寄 付 計 画 家 規 則 組 織 連 帯 感	空 間 会 費 企 画 家 組 織 合 体 感	設 備 補 償 金 地 域 ー ダ ー	設 備 材 等	資 本 金 貯 蓄 等	設 備 材 等	資 本 金 貯 蓄 等	経 営 家 技 術 家 企 画 家 等	法 規 組 織 契 約	や り 気 信 頼 感 連 帯 感	や り 気 信 頼 感 連 帯 感						
計画の手段	創 改 良 維 管	ら 借 入 持 理	は 借 入 持 理	う ら 借 入 持 理	雇 用 奉 仕 する	う 雇 用 奉 仕 する	さ 守 衛 する	め 止 止 する	P 話 集 参	R す 合 加	創 改 良 維 管	ら 借 入 持 理	雇 用 奉 仕 する	う 雇 用 奉 仕 する	さ 守 衛 する	め 止 止 する	P 話 集 参	R す 合 加
計画の構成	組 立				策 定 者				組 立				策 定 者					
	主 体	目 的	対 象	手 段	需 要	供 給	計 画	① 市 町 村 長	② 住 民 代 表	③ 開 発 主 体	④ 専 門 技 術 者	(1) に 同 じ	社 長	役 員	専 門 家			

そういうことから基本方針が決まり、構想が生まれ
てくる。以下精度を高めるために基本計画, 実施計画,
運用計画という手順で進めていくわけである。

(b) 計画の5要素

それをやや応用的に書いたのが表-4で、公共計画
企業の計画に分かれている。この両者のどこが違うか

という、公共計画の場合は主体が地域住民+来訪者であり、企業の場合は顧客、株主、従業員といった人々になる。したがって企業の場合、目的は利潤が中心になり、公共計画の場合の目的は個人の生きがいや幸福、社会的には最大多数の最大幸福ということになる。

次に計画の対象であるが、実際に何か動かすかという「もの」、「かね」、「ひと」、「しくみ」、「こころ」である。つまり、この五つの対象をいかに操作していくかということになる。更にそれを実際にやっていく計画の手段としては「こころ」の例をとあげると、PR、話す、集合、参加ということがあげられ、それによって意志が通じあい、計画がうまく行えるということになる。

最後に計画の構成を書いているが、主体と目的から本来のニーズが出てくる。対象と手段から供給が出てくる。この需給関係を長期ビジョンのもとでうまく整合させていくのが計画である。

以上が私共が行っている空間計画の概要であるが、私はこのすじみち論はレク学の研究計画にも適用できるのではないかと考えている。

3. 討 論

司会(進士) 引続いてディスカッションに移りたいと思う。本日のテーマは最初に申し上げたように、ひとつの結論を得るというものではないが、只今の鈴木先生の講演の中で、①すじみち論、つまり戦略と戦術は参謀と将軍の違いだというお話があり、そのあたりをひとつの軸にしたい。それから社会工学の話をされて②総合学たり得るか、ちょうどレク学も生態学や民俗学に近い問題を抱えているわけで、果して学たり得るのかという議論と、学というものの現代的意義、つまり先ほど社会工学の「工学」というのは手段とか解決法とか、そういう意味でお使いになったと思うが、つまりレク学というものが人間の幸せのために考えなければならない問題を解決できるのか、あるいはそのためにはどうすればよいのかという視点。もうひとつは③先生が提案された体系案に対して、更に付け加えた方がよいという事柄がおありかどうか。それから④先生は模式図をお出しになってレクの概念化のお話をされたが、これはレク一般の話にもどすとやや観光に偏重気味かも知れず、観光レク以外の方々からもご意見があればいただきたい。最後の⑤戦略論は、そのままそっくり「レク学」つまり「レクリエーション」、「レク計画」に置き換えても使える筈だと言われたが、

そのあたりについてもご意見があればいただきたい。

参加者からの意見(要点要約)

(1) 体系化の方法論・すじみち論に関するもの

- ・レクリエーション現象というものは場所や時間等によって多様に変化し、きわめて把握しにくいため、その研究には多くの困難を伴う。したがって、対象の限定つまりそれを捉えるためのパラメーターを決めていく必要があり、そうした現象学的アプローチの積み重ねによってレク学というものが体系化されていくのではないか。(浅田)
- ・人間の「行動」と「心」の二つの軸の中に様々な時代環境の中から生まれるレク現象というものを位置づけ、その動きのパターンをマクロな視点で眺めることによって、体系化の手掛りが見つめるのではないか。(涌井)
- ・鈴木先生が示された13項目の体系案の中で「行動」と「空間」の2つを中心として、まず最初に行動の科学および空間論的視点から内容を深め、段階的に細分化、拡大していけばよい。
- ・レク学の体系化は、その「化」の部分、プロセスの部分に意味がある。様々な人達とレク空間づくりの共同作業をやる中で、ひとつの体系化、プロセスをつめていく学が必要であると思う。(毛塚)
- ・レク学体系化の戦略・戦術等を考える際、いったい我々の敵はどこにいるのか、味方はどこまでなのかを捉えておく必要がある。(西野)
- ・レク学会という名前自体からは、レク活動そのものに頭がいきやすいが、レク学の体系案を考える際には、もっと時間の概念を前面に出すことが必要である。私は名称をレジャーレク学会とするのがよいと考えている。(師岡)

(2) 総合の学についての意見

- ・総合の学、応用の学は学問でないということをお聞きしたが、私はこれからのレク学研究にはこういう方法が大事であり、それもひとつの学問であると考えられる。(松浦)
- ・学問的であるからこそ、日頃自分の領域で解決できなかった問題を解決できる手段となり得る。

(3) レク概念(模式図)に関するもの

- ・心の問題、例えば音楽を聞いたり読書をするといった活動は、先生は修養というように位置づけられたかと思うが、私はレクの分野に含まれると思う。(西野)
- ・カルチャーセンターや家事から発展したレク、例え

ば清物を習うといった生活の中のレクも余暇時間が多くなった今日、レク現象として捉える必要がある。(福留)

- 日本人は空間把握が苦手な人種で、観光のラケット型構造も対象の連続として理解される傾向がある。レクという言葉も輸入語で概念を理解するのが難しい。(石井)
- プラス面、マイナス面という考え方に興味をもったが、何がプラスで何がマイナスなのかをもう少し明確にする必要がある。(石井)

(4) 価値観が変化することについて

- レク学の分野では他の学問にないような価値観の変

化があり、それは現象として捉えることができるかもしれないが、体系化は大変困難であると思う。(石井)

- 価値観の変化をもたらす人間とは何かということをもまず追求しなければならないと考える。
 - 時代とともに価値観がすべて変るとは限らない。むしろ変らないものに注目する必要があるのではないか。(一場)
 - レク現象やそれらの価値が変わるとは思わない。河川に対する価値観もその時代の権力者の考え方によるものだと思う。(石井)
- その他、多くの意見が出たが、紙面の関係で割愛した。御了承願いたい。